

医光学連携 ――若手研究者への期待――

三宅 洋一

(千葉大学名誉教授)

見えないものを見る、いわゆる不可視情報の可視化は、古くから科学技術の本質的な問題としてたゆまぬ研究が続けられてきた。例えば、X線写真の発明以来、MRI、PET、CTなどノーベル賞の対象になった研究も、人体内部の見えない疾病の診断・治療へ応用され、医療技術は格段の進歩を遂げた。その結果、わが国では、人類が経験したことのない速度で高齢化が進んでいる。

先の見えない原発事故の終焉、巨大地震の予兆、異常気象、少子高齢化社会への対応など、われわれ科学技術者、特に、今後を担う若手研究者・技術者の責任は重大である。しかし現実には、多くの大学、研究機関において、若手研究者は特任助教、客員研究員、特別研究員など、非正規雇用、任期制となり、基礎研究を行う環境が悪化している。高度な科学技術研究の第一線を担う研究者が不安定な身分で常に将来に不安を感じていては、地道な研究を行う精神的余裕がもてないのは当然であろう。また、若手研究者は、ようやく助教などのパーマネントの職を得ても、大学の講座制廃止や、助教授は准教授、助手は助教に名称変更され、試験監督、問題作成などから各種委員など、研究に直接関係ない多様な雑務が要求されている。最も研究に集中できる20歳後半からの10年間、雑務に埋もれ研究に没頭できないことは、本人はもちろん、科学技術立国を目指すわが国にとっても大きな損失である。研究費の審査を行っていると、業績を上げるため、困難な問題は避け論文が書きやすい研究テーマが最近増えているように感じる。もちろん、短期的に成果の生じる研究も重要であるが、本号で特集されているように、医学との境界領域には未解明の問題が山積しているように思う。このような研究を遂行するためには、光学の枠に囚われることなく、一方通行ではない医工、医光学連携が必要である。光学研究者にとっては自明のことも医師サイドからはきわめて斬新で、臨床応用への可能性をもつテーマもあり、またその逆もある。将来を担う若手研究者は、困難な問題に果敢に挑戦し、人類福祉に貢献できる研究を行ってほしい。

薄幸の詩人金子みすずの詩「星とたんぼぼ」に「晝のお星は目にみえぬ、見えぬけれどもあるんだよ、見えぬものでもあるんだよ。」という一節がある。不可視情報の可視化研究の本質を突いたような詩である。激しい競争社会の中で、いつも何かに追われ、見えるものも見えなくなっているような昨今、大学教員を目指す若手研究者が、この詩のように感性を研ぎ澄まして基礎研究に没頭できる環境の実現がぜひ必要である。